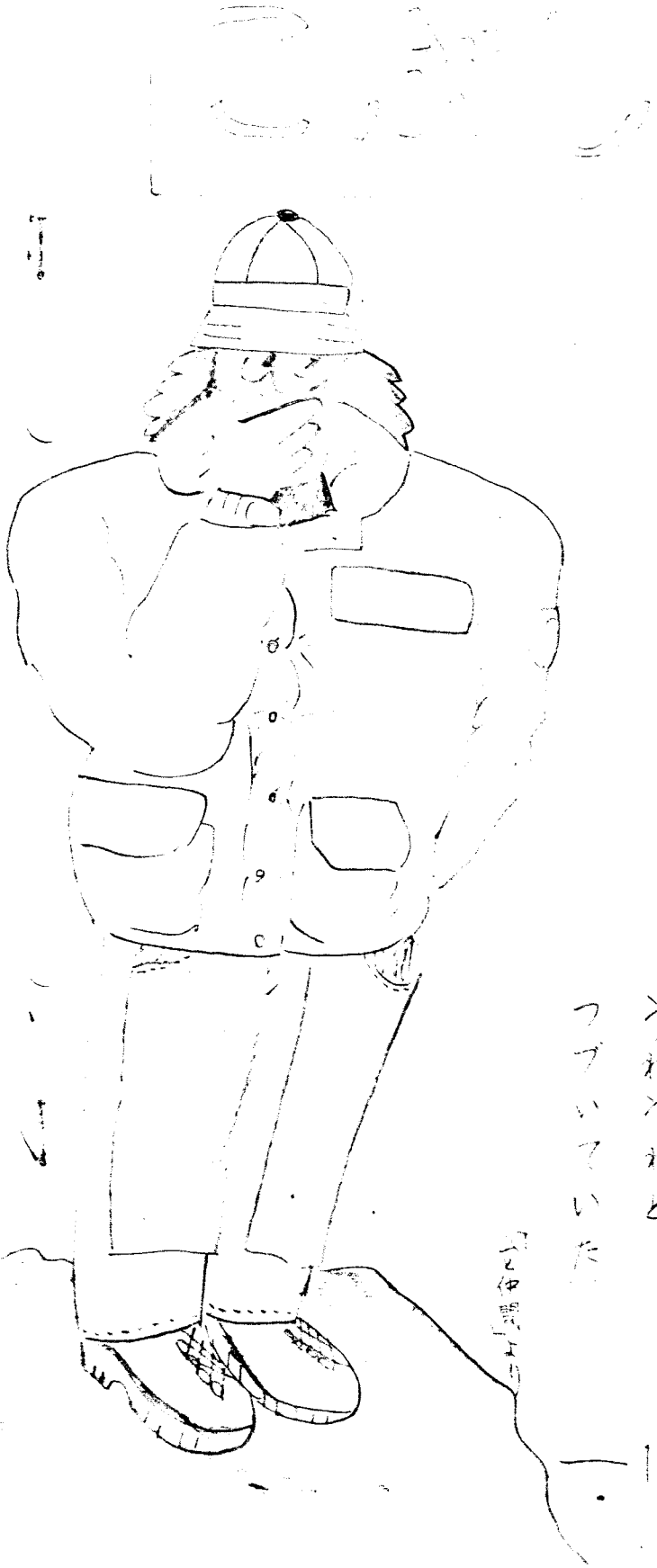
1979. 1. No 22
上越市本町1入村方
上越こぶし山の会



てきい
本当にせまい頂に立つと
青春を背負って
あるいてきた尾根が
足許まで
うねうねと
つづいていた

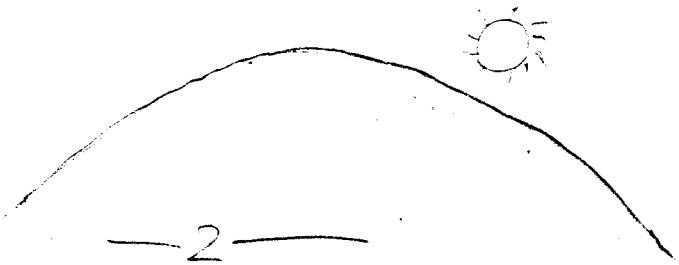
—1—

「乙仲間」より

1979年を迎えて

会長　鳴田五郎

会員の皆さん　新年あけましておめでとうございます。
昨年一年をふりかえると様々な事が走馬燈のようにうかびあがって来ます。会の主な行事としては、正月合宿。五月連休登山、妙高連峰清掃登山、蔵王への大衆山行、八月合宿、又勤労者山岳会主催のカナディアンロッキーへ会員三名が参加した事等その他毎月の定例山行等かぞえあげればかなりの行動となっていますが残念ながら組員は何年来の目標である五十名の壁を超えることが出来ず三十数名を上下している。一方社会の動きは経済不況を反映して、大企業本位の政治の中で企業の合理化が進行し、企業倒産、首切り配転が行われ、再び一九六〇年代から四十年代半ばを思い出す勤評立法である有事立法が大問題となりました。勤労者で組織されている私達の会も、これらの動きに関連しています。
例えば副会長の木島氏は企業の合理化で本社へ転任されるとか、山になかなか行けない状況が出来て退会する人が出るとか、否応なくこれらの動きが会にも反映された一年だったと思います。
新しい年も色々と困難なことが起こりましょうが、私達の労山運動を、発展させ、組織を大きくし、職場地域の登山愛好者と手を結び登山をスポーツとして広めていく活動、自然を破壊する開発に反対する自然保護運動、永年の会の課題である地域研究活動等に全員がとりくみ、これらいくつかの課題を前進させるため団結を強めていきたいと思います。それとわれわれ勤労者の生活をおびやかす公共料金の値上げ計画、一般消費税の導入計画、有事立法等これらに反対する運動も合わせて取り組む必要が有ります。
これらの諸活動を、力を合わせてとりくみ、年の暮には、今年は、よかったと言えるような年にするため頑張りましょう。



山行報告

◇ 12月10日　戸隠山（八方ニラミ）　正月山行の下見山行

メンバー：鈴木・池田・宮腰・古木

最初は一不動の方に向う予定であったが、正月山行が西岳(横根とハ方ニラミの方面になった事で今回はハ方ニラミまでとの計画変更。朝天気が大変良かったが、戸隠に近づくに従って雲が多くなって来、雨もパラついて来た。それでも奥社まで行こうと歩き出す。奥社でもやはり雨。行くか行くまいかで1時間位も奥社でブラブラ。それでも西窟までと出発。西窟で国体の岩ルートを登って帰りとした。

なんということだろうか、12月の戸隠で雨に降られるなんて。ソバを食って早々に高田へと向った。ぼくはバカらしくてタイムもとらなかった。(今に始まったことではないが。)

<国体岩登りルート説明>

西窟より天狗の口ジに向かう右側の壁（約25m）岩は割合かたく、ホールド、スタンス共にたくさんある。戸隠に行ったら是非登って下さい。

◇ 12月16～17日　妙高山、志年山行

メンバー：古木、池田、宮越、阿部、杉本

長野岳山から井上氏他3名が参加して同ルートを登る事になった。12月16日、古木、池田の車は池の平へと向かう。池の平についてがっかり。雪が無い、リフトに乗れない、気が重い。が、天気に恵まれドコかスキー場をあとにして出発。赤倉山のトラバースは雪がかたくて楽、土砂崩山の中にルートを見つけて大谷ユッテに上がりテントを張る。17日朝、天気はあまり良くない。1時間以上の遅れで出発。しかし少ない雪と前の週のトレースが残っていたため、楽なペースで、頂上に着く事ができた。上では穴の中で中食、天気が良く、頂上で子供みたいにマジックメロデオンアを無心に振り回している……世の中、平和と感じる。

正月合宿（戸隠P1尾根）

◇ 12月31日 ～→ 1月2日
本隊（鈴木，杉本，宮腰）
サポート（清水）

12/31 9:35 快晴の空の下，バス停を後にする。楠川橋までツルツルの車道を下る。楠川橋にてワカンをつける。登山届を済ませ、すでにP1、ダイレクトに先行者がいる事を知り、ラッセルの苦業から逃れられると思いホッとする。舗装道路を快適に進み、途中二度休み楠川を渡り平狗平への急登となる。天狗平を過ぎるころよりP1の岩壁を正面に、右にはダイレクトのジャンダルム、左にはP2、P3‥‥と魅惑的な姿を表わす。やがてやせ尾根になり大きなピークを5つ越えると熊の遊場のコルに出る。技術的には全く問題はない。上部には1パーティがテントを張っている。我々もと思い少し登るが適当なテントサイトが無くここに2人用エスパースを張る。
宮腰氏はさっそくオンザロック用のアイスの採取に出かける。 風もなく静かな夜となる。

バス停	→ 楠川橋	→ 唐松林	→ 天狗平	→ 沖1峰	→ B.C
9:35	9:55 10:05	12:00 12:30	13:00 13:20	13:40 14:00	15:30
○	○	○	①	①	①

1/1 8:00 昨日の天気がウソのようにガスがかかり視界は悪い。熊の遊場まで雪壁を登り、中4～5mのクロワールに入る。しばらく直上すると岩壁にぶつかる。バンドを右にトラバースしようとするが荷にひかれ苦労する。雪壁を登り、岩壁下のテラスでアンザイレンする。ここで先行の相模方山隊と合流する。1P2m程の壁を越え、急なブッシュを登りビレイ20m。2Pコンテで30m岩稜に立する。3Pたのクロワールから鎖の出た岩稜を右に越え、大きく右にトラバースぎみに斜上し松の木でビレイ40m。

これより壮烈なラッセルとなる。無念の峰まで全員でモクモクとラッセル。"こんなはずじゃなかった！" 無念の峰よりアプザイレン30mそしてまたラッセル、ナイフエッジ基部となる。ここで小生は空身となりザイルをフィクスする。左手の仏沢は何百mか切れ込んでいるか判らない。ジッとする・40m。5P杉本氏トップ、鎖の出た岩壁を20m程登ると雪庇に頭をおさえられる。杉本氏これを越え松の木でビレイ35m。6P岩稜を40m。これで核心部は終りP_1山頂までまたまたラッセルとなる。P_1着16:30。満天の星空となる。

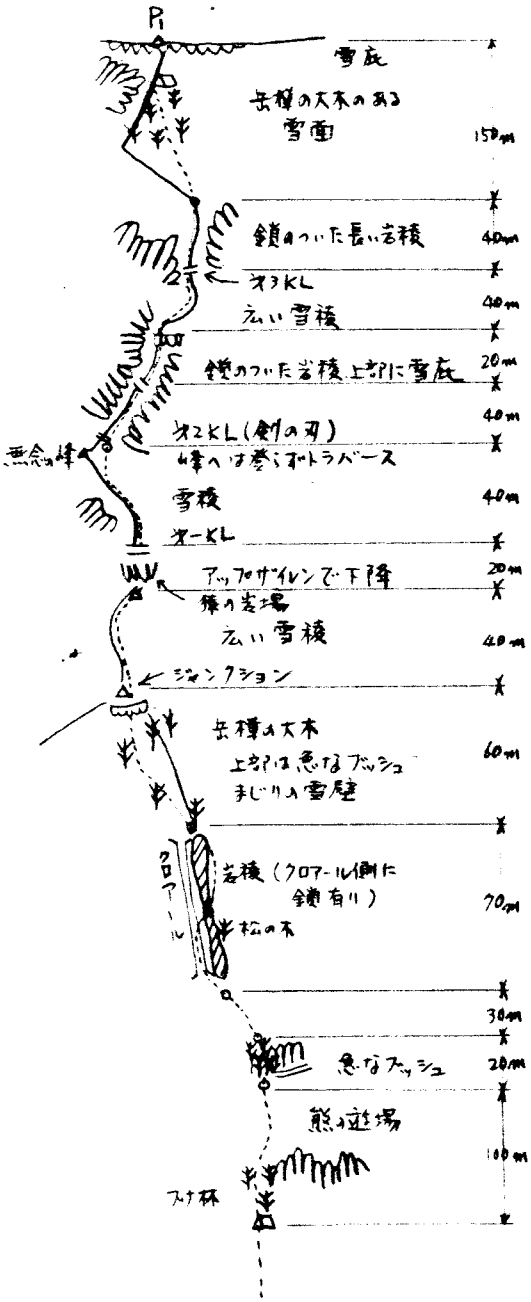
BS	→ 熊の遊場	→ 無念の峰	→ ナイフエッジ	→ P_1
8:00	9:40 9:50	12:00 12:30	13:15	16:30
◎	◎	⊗=	◎	◎

1/2 1:30頃より寒さのためなかなか寝つかれない・シュラフはすっかり湿っている。 8:15快晴の中を出発、杉本氏と小生のスパッツは凍りついてファスナーが上らない。西岳を越える頃より北西の風が吹きはじめる。キレットにて40mのアプザイレン。このころより地吹きとなる。本院岳まで交替でラッセル。本院岳にて2人パーティに会う、"地獄で仏"の気分だ。後は単調な登降となり八方睨に着く。ここで清水氏と再会する。協議の末、今日中に下る事にする。天狗の露路にて古木パーティに会いしばし談笑する。 入口着15:35。

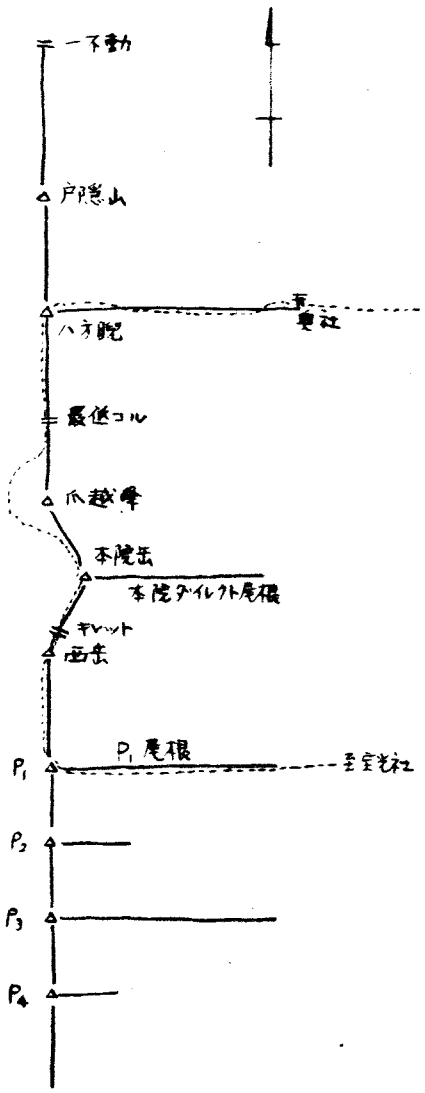
P_1	→ 西岳	→ キレット	→ 本院岳	→ コル	→ 八方睨
8:15	8:50 9:00	9:50	10:50 11:20	11:50 12:00	13:05 13:40
○	◎	⊕	⊕	⊕	◎

→ 西くつ	→ 奥社	→ 入口
14:00 14:20	14:40 14:55	15:35
◎	◎	◎

P1尾根概念図



戸隠連峰概念図



鉾ヶ岳山行を省みて

1979年1月14日（日）

《参加者》 L 古木博明　天尾俊一　名田徹

13日夜半からの降雪で、高田～直江津～島道迄の車中、三人三様の思案が交錯する。平、西平部落を過ぎ微小の雪が降り続く。60cm程の積雪があろうか。

圧雪のため動けず下車しチェーンをはめ島道迄行く。午前10時の天気予報に耳を傾け、無情にも……日中山沿いは、雪になるでしょう。尚、県内に大雪注意報が出ています。"と云う言葉に二、三語言葉を投げかける。多少の無言の後、古木さんの決断"出かけよう"の一声でパッキング仕直し、車を奇のたもとに投げ出し歩きはじめる。鉱泉宿を左手に見ながら、取りかかる尾根筋を物色しつつ川沿いに歩を進める。いよいよ輪かんをはき、ブッシュ、木立の乱雑する急峻な尾根に取りかかる。トップは、古木さん、二番手天尾さん、後尾を私と……。

右手より山越えに、日本海側から北西の季節風が雪まじりに容赦なく吹きつける。左手の沢沿いの上方を見ると、鉱泉宿～蹴水沢い一鉾ヶ岳山頂へと続く夏道ルートが鮮明に見定め得る。

鉾ヶ岳入山は、今回で三度目である。無論厳冬期は、初めてである。ピークを見上げると、北面びっしりと雪がつき、容姿は、雄壮で迫り寄り、なかば圧倒されそうで、冬期の山容の大きさ、力強さを改めて感じさせる。登り続けている尾根の右手沢側から一度ふきみな雪崩の地鳴きが聞かれた。やはり、いつ聞いてもいやな音である。小休止を取りつつ登り始めて二時間程で、トップは天尾さん、二番手私、後尾を古木さんと交替する。しかし、行けども行けども木立の乱雑する急峻な尾根である。本当に三人共、物好きである。

足下を慎重に、木立の間を両手とザックで分け入り、一歩一歩距を前進させる。

目標のピークは、まだまだはるか彼方の上空である。右手からは、相変わらず季節風が吹き続き、視界は全く見渡せない。
右手の方は、沢越えのピークへ続く頂上尾根のルートが鮮明に見定められ、いよいよ寄せつけないのかの様に雄大にそびえ立っている。取りつく際に目安にした肩（コル）へは、またまた遠きよりにもない。1時間程登返し、トップを私と交替し、二番手天尾さん、後尾を古木さんと再結する。多少前方の視界が見渡せる様になって来た。傾斜も緩慢にも単調になり時間をかせぐ。積雪は、折りからの降雪で、膝位迄あろう。目安にしていた肩（コル）が、前方200Mの処に位置する地点に来た。時計の針を見ると、午後2時10分をさしている。一服しつつ今後の行動を協議する。結論が下った。"引き返そう"
ルートを選択する。言葉のやり取りがあり結局、登山ルートを下ることに決定する。下りは楽である。ものの一時間程で、取り付き口へ到着する。荷のたもとの車を放り出している地点迄の道のり、三人で鉾ケ岳を振り返りながら、ピーク迄、四分の一位に位置する肩（コル）を確認し"あの地点迄しか行けなかったんだなあー。"と異口同音に言いながら、全身びっしょりと濡れているダブルヤッケを脱ぎ車に乗り込む。惨敗である。厳冬期入山の際、晩秋に一度現地下見をし、綿密なルート工作プランを立てておく必要性を感じた。機会があれば再度挑戦したい山である。冬山の厳しさ、雄大さ、どれに取り付く人間の存在感の何とちっぽけな事か。だが、用意周到の下で、集団行動を起こす時、大自然は忽連に門戸を開放し、懐深く迎い入れてくれることであろう。

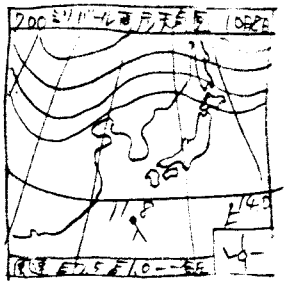
文責（多田　敬）

≪　コース　タイム　≫

高田 8:00（発） → 島道 9:30 10:00 → ヤセ尾根（500M地点） 14:00 14:30 → 取り付き口 15:30 → 島道 16:00 → 高田 17:30（着）

高層天気図について

高田測候所　宮前進



高層天気図とは何でしょうか。地上天気図は地表面の天気状態を表わしたものですが、高層天気図はある高さのところに一つの面が仮にあるとして、そこでの天気状態を表わしたものです。

高層天気図は大きく分けて2通りあります。1つは等圧面天気図、もう1つは等高度面天気図です。現在広く使われているのは等圧面天気図です。

700mbの天気というと、地上が1000mbとすると地上より300mb気圧の低い所の上空ということになります。これは場所によって高くなったり低くなったりします。この近くで高層の気象状態を観測しているのは、米子、輪島、館野などがありますが、例えば米子で3000m、輪島で2950mとかいうように、その場所の上空で700mbの気圧のところがあるわけです。これをつなげてゆくと、1つの地球をおおう面になるという訳です。高い山では、立っているところで700mbくらいの気圧のところもあると思います。富士山頂では645mbくらいですね。登山家のめざす山に概ね3000mの山が多いと言えることから、700mbの天気図は大いに役立つということが言えると思います。

また、地上の気象状態が家や建物、林などによって影響を受けるのと異なり、高層天気図は、空気の大きな流れ、パターンが把握できるのが大きな特徴です。

<高層天気図には何が示されているか。>

(イ) 各観測点での気象状態が示されます。風向、風速、気温、しめり気、高度など。

(ロ) (イ)にもとづいて同じ気温の点を結んだ等温線が引かれます。これと各地の風向きなどにより冷たい空気が入り込んでくるところ、暖かい空気が入り込んでくるところがわかります。

<天気はどうなるか。>

毎日の天気図を見比べると天気がどのように移り変わりをしているかが判ります。

地上天気図で、西高東低の冬型の天気図で日本海側は大雪とか言いますが、上層でもそれは言えます。日本列島の東側ないしは日本列島上に低気圧があり、大陸上に高気圧があると、しかも西ないし北西の風が強いと山では天気が荒れ、登山には適しないと言えます。低気圧が日本海や大陸にあって、日本上空ないしは日本の東側に高気圧があるときは天気が良いと言えますが、その後悪くなってくると言えます。

戦後、科学の発達にともない、上空の気象状態が私達の知るところとなり始めると、この空からの便りが私たちにいい材料を提供することが判りました。「天気予報は高層天気図だけで充分」といいはる予報官もいる程です。

おわり。

新会員の紹介

☆ 近藤千尋　　住所：新井市十日市842-1　TEL. 2-3842
　　所属：北日本ブロック
　　趣味：読書
　　年令：19才

山のうた

坑がつる讃歌

一、ひと皆花に酔う時も
残雪恋し　山に入り
涙を流す山男
雪解の清水に春を知る

二、深山霧島　咲き誇り
山紅に　大山の
峰を仰ぎて　山男
花の情を知るものぞ

三、三百山なるほうがつる
夏はキャンプの火を囲み
夜空を仰ぐ　山男
無我を悟るはこの時ぞ

木島副会長東京へ転勤

長い間、当会の副会長として活躍してこられた木島氏が、去る12月5日、東京へ転勤されました。副会長の私と教育連対委員長の私は解任しましたが、本人の要望で転勤後も会員として残ることになっています。

木島氏の転勤は、当会にとっては大きな痛手ですが、全会員の協力で、会を発展させていかなければなりません。

私達の住む上越地方では、昨年（1978年）春から、木島氏の勤める日本ステンレスや日曹、ダイセル、KCKなどで大人模な「合理化」が強行され、人減らしが行なわれてきました。ここ数年、日本経済はインフレと不況が同時に進行し、働く人達の生活はますます苦しくなってきていました。こうした中で多くの企業では「減量経営」とか、「減収増益政策」とかいって労働者の首切り「合理化」で、これを乗りきろうとしてきたのです。即ち、70年代始めの高度成長期には、莫大な設備投資を行って利益を確保しておきながら、不況になると今度は今までためこんだ利益は1円も出さずに、労働者や国民の犠牲の上にさらに利益をあげようということなのです。

上越地方の一連の首切り「合理化」も、そうした政策にもとずくものでした。

木島氏の勤務する日本ステンレス(株)では、9月に390名の「希望退職募集」という「合理化」計画が発表されました。同社の労働組合は「白紙撤回」をかかげて、ストライキ権も確立していましたが、10月に入って会社と労働組合の間で合意が成

立し、10月下旬から「希望退職」の募集が始まりました。しかし、「希望退職」とは名ばかりで、（「希望退職」とは、退職を希望する人が会社に申し出て、退職するというもの）一定のリストにもとずいて会社側から強引な圧力が加えられ、強制退職となったのです。

木島氏も、この募集期間10日間の間に、13回も職制に呼ばれ、「君はもうこの会社には用はない。すぐやめてくれ。」などと連日、退職を強要されたのです。これに対し、木島氏は「やめる気はないし、やめたくもない。」ときっぱりと拒否したのです。

「希望退職」は、会社の強要によって、目標に近い数に到達し、11月始めに打ちきられました。

ところが、会社は、11月中旬になって今度は転勤問題をもちだしてきたのです。この「転勤」は先の「希望退職」と一体のもので、会社の強要をはねのけて退職しなかった労働者に対して、いっせいにかけられてきました。地区労青婦協の役員とか青年部のもと役員とか、会社にはっきりとものを言う人達が、その対象になっているようです。

木島氏に対して会社は「こぶし山の会は労山だが、君はそこの副会長をしている。君も労山的考えをもっていると考えられる。その考えをすて、労山と縁を切らないかぎり、再び直江津へはもどさない。」といったそうです。

木島氏は今、家族とわかれ、単身で東京で生活しています。転勤は「無期限」といわれ、今のところ帰ってこれるメドはありません。しかし、木島氏は「労山は絶対にやめない。必ずもどれるように、運動する。いつまでも、こんなことがつづくはずがない。」と話していました。

（記　副会長　杉本敏宏）

年間山行計画と学習会のおしらせ（教育遠対）

1979　年間計画

月日	山名	ルート	備考
2.10-12	谷川岳	正面ノ根	東電合同登山
3.18	米山		雪上訓練
4.1	南茅		〃
4.22	ゴンゲン		〃
5.3~6	白馬岳	八方~唐松岳	合宿
6.9~10	尾瀬		30名（ハイキング）
7.1	妙高		山開き，ゴミそうじ
7.8	明星山	3・4 級	岩，雪渓
7.28~29	白馬岳		大雪山行
8.5	金山	ウラ金山谷	沢
8.12-15	槍，穂	北鎌尾根	合宿

教育部（学習会）

第1回目（1月10日）は杉本氏から「会，労山」をテーマで行なわれました。参加者は4名でした。

次は1/24・2/7・2/21です。ぜひ参加して下さい。

年賀状の紹介

11月のふるじまいの時
すい分おせわになりました。
またおじゃまします
・コヒハイ NKK
〒240 横浜市保土ケ谷区天王町
2の50の1 天王町スカイハイツ60206
加藤 和夫

あけましておめでとうございます
昨年はあまり山でお会いする事ができず残念でした。今年こそと思っているのですが……。
みなさまの御健康と御活躍を祈っております
一九七九年　元旦
〒949-04 糸魚川市五岩
石田勉子

その他 労山全国連盟，関連よりも来ています。